

京都・和東天満宮蔵「北野天神縁起絵」小考 ― 掛幅本独自の場面構想と丁類（安楽寺本系）詞書 ―

知 念 理

今年度のコレクション展「社寺縁起」（本誌56ページ参照）において、京都・和東天満宮所蔵「北野天神縁起絵」（以下、「和東本」とよぶ）を全四幅揃いで展示公開した。龍谷ミュージアムの特別展「絵解き」^{〔1〕} について？ 語り継がれる仏教絵画」（二〇一二年）以来、九年振りのことであつた。企画準備を進める中で、掛幅本独自の場面構想、および丁類（安楽寺本系）詞書との関係性に注意が引かれたことから、和東本の位置づけをめぐって若干の考察をノートしておきたい。

一

「和東本」は、掛幅形式の天神縁起絵では現存最古の作例として知られている^{〔2〕}。濃麗な彩色と的確な線描にはややもつたりとした地方色もみえながら、鎌倉時代のやまと絵様式を受け継ぐ古様が保たれ、制作は南北朝～室町時代初期（十四世紀）にさかのぼると目される。同宮には詞書だけの縁起（上・下二巻）も伝えられており、これをもとに絵解きされていたと推測される作例である。

その第四幅の下方には、小高い丘の上に建つ同宮の社景が配され

る【口絵1】・【図5】。本作は「和東天神縁起」の名称でも知られるように、いわゆる「ご当地縁起」の早い時期の作例としても注目される。馬道のついた割拝殿、流造の本殿、その両側に春日造の社殿を配した社景は実際の景観にもとづく描写である。上述の詞書は、それまで伝わった縁起の文字が読みづらくなつたため新たに書写されたもの（奥書Ⅱ寛文十二年／一六七二）で、下巻の最後に和東天神の略縁起が挿入される【図1】。

和東郷、天神宮は建長のはじめ／後深草院みことのりを下し給ひ、米山之某／新たに北野よりうつし奉る処也。其後代々をへて／後小松院御宇、応永の末つ方神主義俊／かさねて宣旨をかぶり修造せしむ。朝夕の清め／おこたることなし。およそ此御神にあゆみをはこぶ／ともがらは、今生にては智福繁盛し、来世／にては安楽国に生るべきものならん。

（清濁、句読点を加え、一部表記を改めた）

和東天神の勧請は社伝によれば建長三年（一二五一）とされ、現本殿は棟木墨書から貞和四年（一二三八）の建立と知れる。「和東本」四幅の制作は、絵の様式からも右の貞和再建に関わらせて考え

ることができると考えるが、少なくとも略縁起が語る、義俊による再興があった応永（一三九四―一四二八）の末頃までには同寺に伝来したものだろう。

「和束本」の各幅画面は、淡い色調の霞を薄く引いて三―四段に階層化され、それぞれ以下に示したような場面が割り当てられる。

およそ第一―二幅に道真の生涯、第三幅に道真没後のたたき、第四幅に北野社造営とその利生譚、ならびに和束天神宮由来が描かれる。⁽²⁾

第一幅【図2】

- 1 「道真化現」 2 「幼少詩作」 3 「序文執筆」 4 「弓射妙技」
- 5 「五十賀祝」 6 「菅公参内」 7 「行幸密議」 8 「法皇佇立」
- 9 「紅梅別離」

第二幅【図3】

- 1 「羅城門鬼」 2 「配流陸路」 3 「配流海路」 4 「恩賜御衣」
- 5 「長谷雄嘆」 6 「祈天拝山」 7 《雲上天神》 8 「安楽寺葬」

第三幅【図4】

- 1 「神靈化来」 2 「雷神襲来」 3 「尊意渡河」 4 「時平病臥」
- 5 「公忠奏上」 6 《冥宮直訴》 7 「落雷災禍」 8 「落飾崩御」
- 9 「日藏巡歴」 10 「日藏奏上」

第四幅【図5】

- 1 「綾子託宣」 2 「比良託宣」 3 「社殿作事」 4 「虫喰和歌」
- 5 「官位追贈」 6 《託宣詩書》 7 「盗衣神罰」 8 「仁俊祈祷」
- 9 「不敬神罰」 10 「西念参籠」 11 「病母死去」 12 「姉妹虐待」
- 13 「姉妹参籠」 14 「和束天神」

《 》内は本稿での便宜的仮称
第二幅を除いて、おおむね画面の右から左へ、返して右下へ、ま

た左へと、蛇行を繰り返すように下降しつつ諸段を展開する。各場面に人物名、または場面内容を短く墨書した大きめの短冊形が配される。白色地の補彩、墨書の補筆により残存良好な短冊形と、剥落が進みよく判読できない短冊形がみられ、すべてが同じ位置に制作当初からあったものかどうかはわからない。

「和束本」の各場面は一見して、弘安本系作例との関係性は希薄である。津田本系の先行作例が基調になっている場面が全体の四分の一ほどを占めて優勢であるが、単純な転写関係はほとんど見当たらない。絵解きされる際の一定の距離感を前提にした図様細部の省略も確認でき、全体としては掛幅装への転換にともなう新たな作画構想が生んだ一異本というべき変容をみせている。

二

「和束本」の場面描写の特異な性格については、従来から次のような点が指摘されている。「紅梅別離」（第一幅の9）で、梅樹、桜樹の傍らに坐すそれぞれの道真が並び描かれること【図6】、および「祈天拝山」（第二幅の6）で、観世音寺とも思われる寺院が描き加えられること⁽³⁾、また、縁起文の構成からは「配流陸路」（第二幅の2）、「配流海路」（第二幅の3）の順で連続する場面が逆転して画面の上下に分断されていること、および詞書の位置からは第一幅に配置されるのが順当とみられる「羅城門鬼」が第二幅中段に描かれていること⁽⁴⁾（以上【図3】）、があげられる。

とくに第二幅では、場面配置を自由に再構成している点が大きな問題で、3「配流海路」の左、画面最上段に位置する6「祈天拝山」も当然、縁起文との関係では位置が乱れている。これについて

は、道真が高山に登り天道へ祭文を捧げる場面の空間性ゆえと考えられるが、その右下に「天神」の短冊形とともに雲上の東帯坐像が飛来する（水際ではなく、網敷でもない）という珍しい図様・7《雲上天神》【図7】の付加があり、種々の特異な場面構成に注意されるのである。

画面中ほどの1「羅城門鬼」は、羅城門を通りかかった都良香が、考えあぐんでいた詩の下句を鬼から授かる場面、その後、道真のもとを訪れて我が物顔で詩を披露したところ鬼の付句と見破られ、良香が面目を失う場面がやや右下に描かれる。ただ、鬼に直面する人物に添えられた短冊形の墨書「紀納言」は誤りで、「都良香」が正しい。経年の剥落で短冊形を補彩・補筆した際だろう、5「長谷雄嘆」の場面が隣接することから人物名を混同したものと推測する。

この段は「時平笑癖」とともに「日本我朝は神明の御めぐみことにさかりなり」で始まる天神縁起の乙類第二種に特有の説話である。先述の「和束本」に付属する詞書もこの系統で、乙類第一種の「津田本」（津田天満神社蔵、永仁六年・一二九八）にはまだ存在せず、後統の「光増本」（もと絵巻、永徳三年・一三八三）までの間に乙類に補入されたとされる。⁵ 絵巻の現存作例としては「光信本」、「光起本」（いずれも北野天満宮蔵）が知られるものの、「光信本」（文亀三年・一五〇三）以前の絵画化については判然とせず、本説話の絵画化が確認できる「和束本」は、「光信本」をさかのぼるとみてよい唯一の現存作例として貴重である。

では、詞書としては「弓射妙技」と「五十賀祝」（第一幅の4、同5）の間に位置する段である「羅城門鬼」が、なぜ「和束本」では第二幅の中ほどへ配置されているのだろうか。⁶

それは、この場面と並ぶ4「恩賜御衣」、5「長谷雄嘆」との説話的な相関関係によるのではないかと考えられる。前者は道真が宮中の重陽宴で詠んだ詩が素晴らしく、帝が観感のあまり自ら脱いだ御衣を与えたことや、太宰府で詠んだ詩が白楽天にも勝ると評されたと述べる。後者は道真から太宰府で詠んだ詩を集めた『後集』が中納言紀長谷雄に届けられ、道真の才能を惜しみ、深い嘆きが述べられる。つまり、道真の詩人、文人としての神通力を印象付ける1「羅城門鬼」の説話は、やはりその卓越した詩才を述べる4「恩賜御衣」、5「長谷雄嘆」の両段とともに連続的に絵解きするほうが、プロットとしての特徴が強化され、聴き手側への効果的なストーリーの浸透を図ることができると考えたのではないだろうか。

すると、7《雲上天神》と呼んだ珍しい図様の付加も、右のような「和束本」の唱導的志向に起因するものと理解できはしないだろうか。「祈天拝山」の段の趣旨について、

「怨を報」じ、「世界の災難」を支配する天神道真の存在を帝釈天（さらにいえば、広く護国經典に説かれている天部の仏法守護神）と同等に位置づけて、これよりのちの縁起諸段における怨霊の活動と北野天満宮鎮座を予告するものとみるべきで、「實在人物としての道真から神としての道真の顕現へ」という縁起のストーリーの中では、極めて重要な位置にある。⁷

という指摘をふまえれば、7《雲上天神》は、天道に祭文を昇らせ、生身のまま道真が神霊化した「その時」を画面上に可視化したものとみれ、絵解きによって享受された「和束本」にふさわしい作画構想であると考えられるのである。

都ヲ出シ始ニハ、三界火宅ヲ、無由事ニ思テ、佛道ヲ欣セ玉ヒケレドモ、配所ニ下テ後ハ、我、悪神ト成テ、怨ヲ報ハント被思食ケリ。所以、心ハ朝夕ニカハリ行、尚是、凡夫ニ似同シ給ヒケルニヤ、一切ハ心之所作也、願ニ随ヒ、其形ヲナス、悪行ヲ造ラント願ハズ乎^⑧

(清濁、句読点を加え、一部表記を改めた、以下の引用同じ。)

右に引いたのは、甲類を大幅に改編した丁類(安楽寺本系)の詞書で、その「祈天拝山」の末尾に独自に増補された詞章である^⑨。復讐を誓う怨霊の前身出現を鮮明に叙述する劇的な語り口は、甲類や乙類のそれとは異質で、むしろ「和束本」の7《雲上天神》絵画化のための有効な触媒となっている、といえば言い過ぎだろうか。いや、掛幅形式の「和束本」が絵解きによって享受される作例であったことを改めて思えば、唱導色の濃い詞章による増補、潤色を特徴とする丁類詞書との接触はむしろ自然な制作環境として考慮しておく必要があるだろう。丁類のテキストは、「北野天満宮から各地へ、その宣教に派遣された神人・御師の唱導台本に用いられ、あるいは、その人々によって、各地の天満宮に伝播されたものと」みられ、「絵を含むことがなく、耳で聴聞するだけでも深い感動を催すべく、叙述は詳細になり、誇張された物語的表現となっている」^⑩とされる。

三

こうした観点に立てば、第二幅最上段に3「配流海路」、最下段に2「配流陸路」と逆転、分断された作画構想についても解釈の糸口を見出すことができる。格段に大きなスペースを与えられ画面最下段へ配された2「配流陸路」がここでは問題となる。

絵巻諸作例の「配流陸路」はおおむね、道真が乗る牛車とそれを囲む近習ら、および牛車を後方から見送る騎乗の武官らの姿をクローズアップする。一方、「和束本」では館の門塀を添えて俯瞰的にとらえ、都をあとに悲哀の旅路へ赴く道真の「その時」を演出する。そしてこの場面描写には、牛車に乗る道真の姿とともに、白の狩衣に烏帽子を着し、騎乗して揃い並んだ公達四人に対しても、観者の十分な注意を差し向けようとする配慮がうかがわれる。

公達らの傍らの短冊形は、ムラのある白色がかぶさり墨書が判読しづらいが、左端の公達の短冊形だけは「御子息」と墨書がなんとか読める。すると、この公達らは道真の左遷にともない配流された四人の子息となろう。こうした異色の場面描写、作画構想への理解を助けてくれるのが、やはり丁類の詞書「紅梅別離」の段の冒頭にみられる独自の増補である。

菅丞相、御子息之間、廿三人坐キ、男子四人ハ、同四方へ被流給ヌ。残十九人ハ、妃宮ニテソ御坐ケル、或京ニ奉留メ、或筑紫へ奉具タマヘリ。所以、筑紫へ下リ給ヘルハ、父ニ奉副事ハ、ウレシケレドモ、母ニ奉別事ヲ悲ミ、京ニ留リ給ヘルハ、母ニ奉副事ハ、ウレシケレドモ、父ニ奉別事ヲ悲ミ給ヘリ。責テノ御事ニハ、便宜アラバ、必消息ヲ通ゼント、契セタマフバカリゾ、自ノ御ナグサミ也ケル、サラデハ、互ノ御嘆、申モ中々愚也^⑪。

甲、乙、丙類では簡略にしか述べられない、配流によって引き裂かれる妻子らの悲哀を強調する右のような話柄は、「和束本」の特異な作画構想と密接な関係有するものであると認められる^⑫。つまり第二幅最下段の2「配流陸路」は、第一幅最下段の9「紅梅別

離」のイメージをも包含した場面描写と考えるべきで、道真の受難と一族の悲哀に対する、聴き手側の一段の情緒的高揚を誘う有効なイメージとして重視されたと解釈できる。

興味深いのは、この両場面は物理的には第一幅、第二幅に分かれるものの、実際の絵解きに際しては、聴き手から見て両幅の最下段で並列し、「紅梅別離」から「配流陸路」へという詞書の流れに沿った連続性を確保した掛幅本独自の空間構想で結ばれていることである。そして2「配流陸路」のすぐ上方には8「安楽寺葬」が位置する。失意の道真が乗る牛車と、道真の遺骸をのせ簾を垂らした牛車を近接させた対比的描写も、物語前半のクライマックスを劇的に視覚演出（絵解き）しようとする意図の表れにはかならない。第二幅における2「配流陸路」の変則的に見える配置からは、こうした作画構想が読み取れるのである。

四

「和束本」の特異な場面描写について、続いて第三幅【図4】について考えてみたい。まず、1「神霊化来」については、法性房尊意のもとを道真の神霊が訪れる場面、柘榴を吐きかけ炎上させる場面が別々の堂内での出来事として描き分けられる絵巻諸本に対し、掛幅画面に適應するよう簡潔な異時同図により描かれ特徴的である。また3「尊意渡河」であるが、絵巻諸本を通じて描写内容に大きな違いがみられない場面だが、「和束本」は疾駆する牛車ではなく、輿による渡河を描く点が珍しい。類例はごくまれで、官見の限り「岩松宮本」（国立歴史民俗博物館蔵）を知りうるのみであることを指摘しておく。

次に、5「公忠奏上」であるが、頓死した右大弁源公忠が、時平の讒奏に対する醍醐天皇の短慮を、閻魔王宮の冥官らに訴える道真の姿を目撃し、蘇生してのち、その様子を醍醐天皇に奏上する場面である。絵巻諸例では、蘇生した公忠の参内・奏上の態を描く類型的な場面描写が通例である。「和束本」にもその場面はあり、さらに、いま仮に6《冥宮直訴》と名付けた、公忠が目撃した閻魔王宮での様子を絵画化し、類例のない二場面構成としている【図8】。事蹟の展開を追うのみならず、詞書の積極的な絵画化を進める点で、やはり「和束本」ならではの唱導性を重視した作画構想が認められる。最後に、第四幅【口絵1】・【図5】について、5「官位追贈」をとりあげる。一条天皇の時代に、道真に対して正一位左大臣、ついで太政大臣と二度の官位追贈があり、二度とも天神の託宣詩が下される奇瑞があったという場面である。絵巻諸例では、安楽寺に参詣し位記を読み上げる勅使らの姿を描く類型的な描写が通例であるが、「和束本」はその場面に加え、安楽寺の上方に霞を広くかけて大きなスペースを確保し、6《託宣詩書》と仮称を付したもう一場面を付加する【図9】。つまり、大岩が亡者たちの身を挟み砕く責め苦は衆合地獄で、その上方には「天神」（短冊形墨書）と、地面に坐して筆をとり、書をしたためる地獄の亡者が向き合う情景が描かれるのである。

この場面は、「日藏巡歴」（第三幅の9）の六道巡りがここへ紛れ込んできたのではない。これこそ丁類の詞書によって絵画化されたと認められる特異な場面描写として特筆される。すなわち、

同五年二、相次ギテ、正一位大政大臣大相國トゾ、贈ラセ給タリケル、是ヲモ、石面ニ彫テ、御廟ノ上ニ、被立タリケル

トカヤ。此時ゾ、天神ノ御心弱テ、衆合地獄ニ墮タリケル、小野道風ヲ招テ、御請文、被書タリケル。

(託宣詩略す)

トゾ、被書タリケル。内裏ニ被候ケル、女房ノ夢ニ、見ヘケルコトハ、菅贈大相國ノ請文ハ、手跡ヲ撰バレンガ為、衆合地獄ヨリ、道風ヲ呼出シテ、詠ヘテ、逢セタル也、常ニ詠ゼン人ヲバ、毎日ニ七度、守護セントゾ、被示タリケル(後略)⁽¹³⁾

すなわち、太政大臣が追贈された折に、心安らいだ天神が再び託宣詩を下し、衆合地獄に堕ちていた能筆の小野道風を呼び出してその詩を書することを命じた。そして後世に伝えられたこの御請文は、まさしく道風の筆跡とわかるほどの書であったという。縁起から物語へ、という変質をとげてゆく丁類詞書の特徴をよく示す説話を採用したこの場面描写は、第三幅の5「公忠奏上」に付加された6《冥宮直訴》とともに、絵解きによって享受された掛幅本である「和束本」らしい作画構想を印象付けるものといえる。

以上、「和束本」における特異な場面描写についての若干の私見を述べた。従来から釈然とした解釈がえられていなかった第二幅の場面描写、配置を中心に、四幅全場面の特定を目指し、丁類詞書との関係を明らかにしながら考察を試みた。また、事蹟の展開を追うのみならず、唱導性を重視して、詞書の絵画化を積極的に開拓しようとする「和束本」独自の作画構想を明らかにした。

一方、本論では触れえなかったが、丁類縁起が異常な力を込めて六道巡りを語る「日蔵巡歴」の段は、いたって常套的な場面描写(第三幅の9)で済ませている。これは絵解きによる唱導性に支え

られた「和束本」の作画構想としては、逆に物足りなさが残るところでもあるが、丁類詞書と密接に関わるお伽草子「天神の本地」への展開なども視野に、享受層、制作背景の考究からその解釈を進めることを今後の課題としたい。

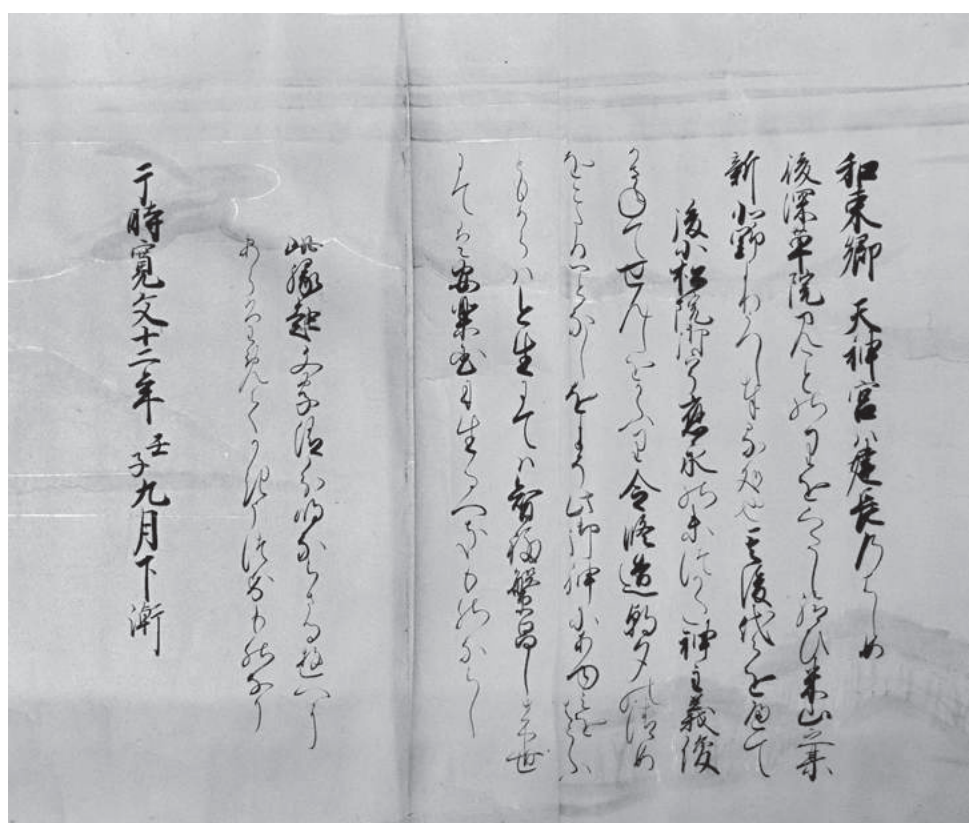
さいごに、天神縁起に関する先行研究、絵巻諸本の場面描写等への見識の不足をお断わりするとともに、大方よりご教示を切に願いますものである。

註

- 1 和束本…絹本着色、四幅、各一四九・五×八六・〇センチ、京都府指定文化財。
- 2 縁起の場面呼称については基本的に、須賀みほ『天神縁起の系譜 研究・資料篇』(中央公論美術出版、二〇〇四年)によった。
- 3 「和束天神縁起絵」(出品No.15作品解説・鈴木幸人)、『天神さまの美術―菅原道真没後千百年―』(東京国立博物館、福岡市博物館、大阪市立美術館編、二〇〇一年)所収。
- 4 「絹本着色和束天神縁起」(作品解説・米谷優)、『京都の文化財第一〇集』(京都府教育委員会、一九九二年)所収。
- 5 乙類と「羅城門鬼」説話との関係については以下を参照。
梅津次郎『天神縁起絵巻―津田本と光信本―』、『美術研究』一二六号、一九四二年。
村上学『神道集巻第九「北野天神事」ノート(一)』、『名古屋大学国語国文学』第十五号、一九六四年。
松本隆信「中世における本地物の研究(四)―本地物の成立と北野天神縁起」、『斯道文庫論集』第十四輯、一九七七年。
黒木香「都良香像の変質と「天神縁起」―鬼の付句をめぐる―」、『国文学攷』一〇四号、一九八四年。
真保亨「安楽寺本系北野天神縁起について」、『藝叢』九号、一九九三年。
同『北野聖廟絵の研究』(中央公論美術出版、一九九四年)所収。
なお「光増本」については、『北野文叢』卷二十二(「北野誌」地、北野神社社務所編、明治四十三年)所収の「天神記」参照。

- 6 後述する丁類も「羅城門鬼」を所載する系統だが、乙類とは挿入位置がやや異なる。「五十賀祝」と「菅公参内」の間に位置するものの、順当に配置すればやはり第一幅中におさまる場面である。
- 7 武居明男「Ⅰ 北野天神縁起を読む 史実と伝承」、同編『天神縁起を読む』（吉川弘文館、二〇〇八年）所収。
- 8 筑波大学所蔵「天満天神縁起」（康暦二・一三八〇年書写）の翻刻による。『室町時代物語大成 第十』（角川書店、一九八二年）所収。
- 9 丁類はまず国文学の見地から、「聴聞」のために、絵を伴わない「語り物」として文章を成長させた縁起で、「北野神社の縁起」から「道真の受難と報復の物語」へと諸段を集約させると位置づけられた（前掲註5村上「同論文」）。そして祖本の成立は鎌倉時代末期以降、十四世紀と考えられた（前掲註5松本「同論文」）。その後、美術史側からは、「北野本地本」（諸所分蔵）の一部の段にすでに丁類の詞書がとられていること、祖本成立は十三世紀前半と考えられること、また丁類の詳細な六道の描写が「承久本」（北野天満宮蔵）の克明な絵画表現に影響を及ぼしたとの指摘がなされた（前掲註5真保「同論文」）。なお近年にかけては丁類縁起とその絵画化をめぐる近世期の作例が発掘されている（鈴木幸人「菅公イメージの変容と系譜—京都・常照皇寺伝来の北野天神縁起絵巻について—」、『鹿島美術研究』、年報第二十三号別冊、二〇〇六年。同「二 近世における北野天神縁起絵巻の制作」、前掲註7竹居編『同書』所収）。
- 10 福田晃「天神縁起と天神伝説」、『神話の中世』（三弥井書店、一九九七年）所収。
- 11 前掲註8『同書』。
- 12 丁類の詞書では「安楽寺葬」の前段である「菅公薨去」にも、道真の死に直面する妻子ら（特に姫君たち）の悲哀を強調する大幅な増補がみられる。
- 13 前掲註8『同書』。なお、延慶本平家物語には、丁類詞書から本説話を取り込んだ章段が含まれることが指摘される。小番達「延慶本平家物語における天神信仰関連記事をめぐる—第四・六「安楽寺由来事付霊験無双事」形成過程の一端—」、『中世文学』五十三巻、二〇〇八年。

（付記）画像掲載を承諾いただきました和東天満宮のご高配に感謝申し上げます。



【図1】和東天神略縁起（「北野天神縁起」下巻末）



【图2】第一幅



【图3】第二幅



【图4】第三幅



【图5】第四幅



【图7】



【图6】



【图8】



【图9】